



文化財保護シンボルマーク

京都府京田辺市

稻葉遺跡第4次発掘調査概報

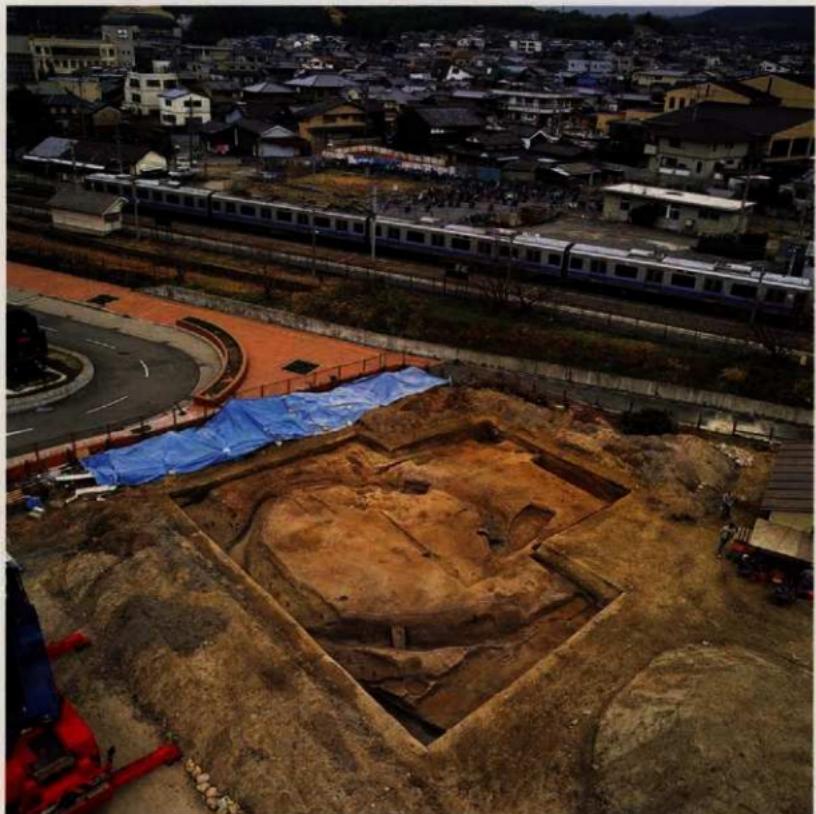
1998

京田辺市教育委員会

稻葉遺跡第4次発掘調査概報

1998

京田辺市教育委員会



1 トレンチ全景（北東から）

序

京田辺市の鉄道の玄関口にあたる近鉄新田辺駅・JR京田辺駅に挟まれた一帯は、近年土地区画整理事業が実施され、高層建築が相次いで建てられ街の姿になりつつあります。

今回の報告は、この地域一帯に広がる稻葉遺跡の第4次発掘調査の概要報告です。

調査により、山城地域でも発見例の少ない弥生時代前期の方形周溝墓がみつかり、さらに古い時代となる縄紋時代の土器もみつかりました。付近には、今から2000年以上も前のムラがあることが考えられるようになりました。

最後になりましたが、調査にあたって、株式会社平和堂・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことをお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解たまわりますようお願い申しあげます。

平成10年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村 田 新之昇

例 言

- 1 本書は、京田辺市教育委員会が行った稲葉遺跡の第4次発掘調査の概要報告である。
- 2 調査は株式会社平和堂（代表取締役 夏原平和）の依頼を受け、平成8年度に現地調査を、平成9年度に整理作業を実施した。
- 3 調査地の地番は京田辺市田辺明田60番地である。
- 4 現地調査は平成9年2月12日から開始し3月27日に終了した。
- 5 調査組織は次のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会（平成8年度は田辺町教育委員会）

調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 村田新之昇

調査指導……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会

調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎

同 上 鳥居 幸一（平成9年3月30日まで）

調査事務局……京田辺市教育委員会 教育次長 中川 勝之

同 参事 古川 章

同 社会教育課 課長 奥田 清

同 課長補佐 小西ケイ子

調査参加者……高木 克彦・植西美津子・原 クニ江

- 6 調査を実施するについて、株式会社平和堂・株式会社東洋設計事務所には多大のご協力を賜った。記して感謝します。

- 7 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を得た。記して感謝の意とします。（順不同・敬称略）

肥後弘幸・鍋田 勇・福島孝行・辻本和美・森下 衛・國下多美樹・秋山浩三・小泉裕司・岡田憲一

- 8 本書の執筆・編集は鷹野が行った。繩紋土器の実測等には岡田憲一氏にお世話になった。

本文目次

1はじめに	1
2位置と既往の調査	2
3調査経過	6
4調査概要	8
5遺物	12
6まとめ	15

挿図目次

巻頭 1トレンチ全景

第1図 調査地位置図	1
第2図 稲葉遺跡全景（南から）	2
第3図 周辺主要遺跡図	3
第4図 周辺地形図	5
第5図 作業風景（西から）	6
第6図 現地説明会風景	6
第7図 作業風景（北から）	7
第8図 方形周溝墓溝土層断面図	8
第9図 1トレンチ調査図	9
第10図 方形周溝墓全景（北西から）	10
第11図 方形周溝墓全景（南東から）	10
第12図 周溝北東アゼ断面	11
第13図 遺物実測図	13
第14図 石器実測図	14
第15図 遺物	14

1 はじめに

稲葉遺跡は、京田辺市の鉄道玄関口である近鉄新田辺駅西側からJR京田辺駅西側にまで広がる南北約950m・東西約550mに及ぶ遺跡として知られている。

株式会社平和堂では、かねてより田辺店を計画していたが、平成8年8月に田辺明田60番地に店舗をすべく文化財保護法に基づく届出を提出された。当教育委員会では、開発面積が約13,000m²と広大であるため、とりあえず事前に試掘調査を実施し、その結果により再度協議を行うこととした。

試掘調査は平成8年11月11日から13日まで、対象地に15か所のトレーナーを設定し行った。その結果、造構や遺物がみつかった2か所については、調査区を拡張して調査を行うこととなったが、他の発掘調査との関係から平成9年2月12日から拡張の調査にはいり、平成9年3月27日に終了した。

なお、株式会社平和堂をはじめ関係者の方々、ご指導・ご協力くださった皆さま、厳寒のなか調査に従事された諸氏、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査位置図 (S=1:20,000)

2 位置と既往の調査

京田辺市は京都府南部に広がる南山城平野のはば中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。市の西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い市である。西部の丘陵から木津川に流れる諸河川は、多くが平野部で天井川化しており、市の景観は独特の様相を呈している。

稲葉遺跡は市の中央部やや北寄りに位置し、近鉄京都線・国道307号・天津神川・幹線排水路に囲まれた部分である。地形は南西が高く北東に向かい徐々に下がっていく。

周辺の弥生時代の遺跡をみてみると、前期では宮ノ下遺跡で土塙群が、また平成9年度の調査で三山木遺跡（山崎北方遺跡・田中遺跡）から同じく前期後半の土塙がみつかった。

中期では、興戸遺跡の低地部で土器棺墓、府道より西の高い部分で溝が見つかっている。この興戸遺跡の東方の大切遺跡では溝、南垣内遺跡では $16m \times 14m$ の大きな方形周溝墓が単独でみつかっている。一方標高80mの田辺城跡下層からは直径8~10mの竪穴住居跡3棟、方形周溝墓、土器棺墓がみつかった。これらの中期の造構は概ねIV様式前半に属するものが多い。

後期では、以前から知られる田辺天神山遺跡・飯岡遺跡に加え、興戸遺跡の西側丘陵上



第2図 稲葉遺跡全景 昭和57年（1982）撮影（南から）



第3図 周辺主要遺跡図 (S = 1:25,000)

の興戸1号墳下層から方形竪穴住居跡がみつかったほか、田辺城跡下層でも方形竪穴住居跡がみられた。

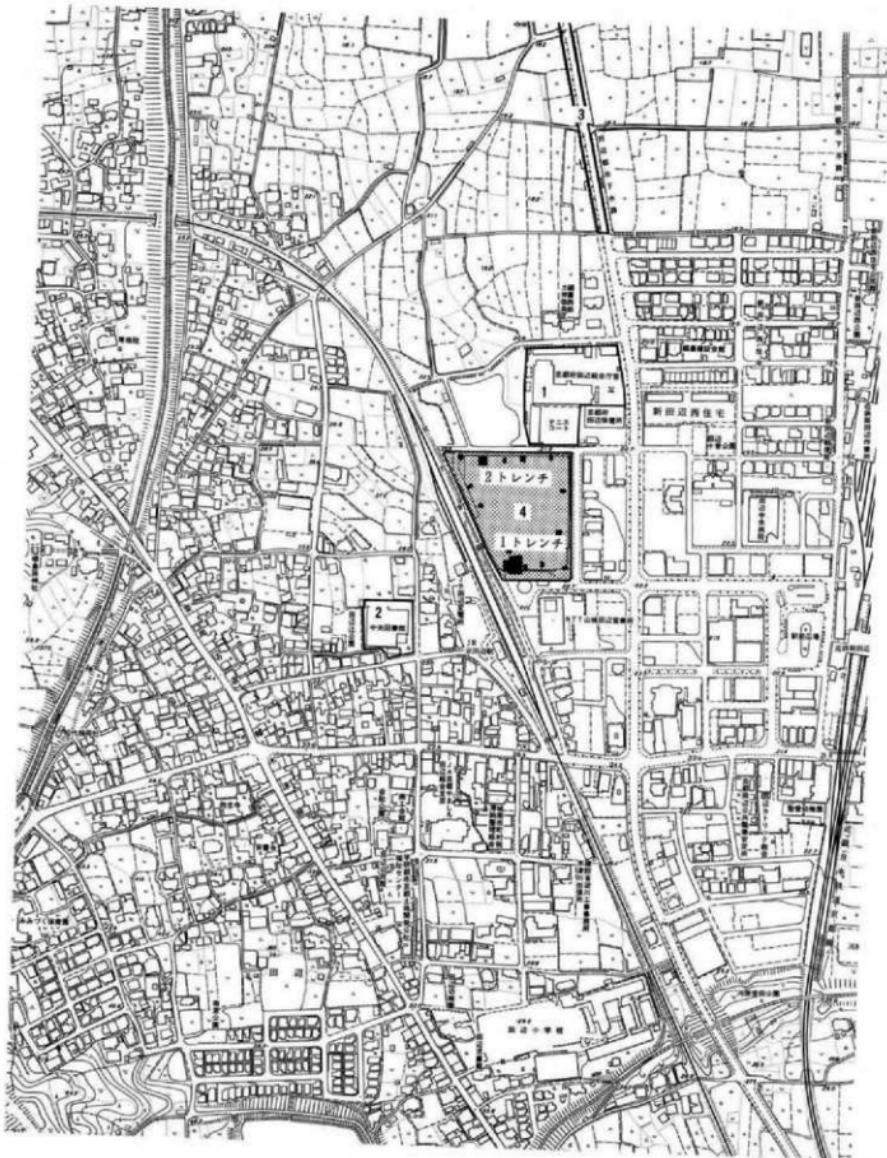
このように市内の中南部では、今回の前期の方形周溝墓を含め、丘陵上、平地部とともに弥生時代の遺構発見例が増加してきている。まだ集落像等不明なところが多いが、前期後半に集落が点在はじめ、IV様式の時期（いわゆる四線紋の時期）に集落が丘陵上、平地部とともに増加し、V様式の時期に丘陵上の集落が目立つという傾向がよみとれるのではないか。

稻葉遺跡で初めて発掘調査が行われたのは、京都府田辺総合庁舎建設とともになう調査で、昭和51年（1976）のことであった。時期不明の溝状遺構がみつかったほか、顯著な遺構はなかったが、平安時代前期（9世紀）の土器類が多くみつかり、とくに墨書き土器（「野」）・須恵器のフタを利用した転用硯・瓦などの一般集落ではない官衙的な遺物がみられるることは注目された（第1次調査とする）。

第2次調査は、平成2年（1990）2月に実施した市立中央図書館建設とともになう調査である。そこは昭和61年（1986）まで田辺町の役場建物があったところでもある。3か所のトレンチを設定したが、遺構・遺物ともみつけられなかった。

平成4年（1992）には、都市計画道路である新田辺駅前線・薪新田辺線建設にともない路線内で試掘調査を行った。位置的には第1次調査地の北方である。中世を中心とする遺物が少量みつかったが、遺構はなかった。付近は中世期には大きな深い沼沢地であったことが推定された（第3次調査）。

以上のような発掘調査の結果であるが、この地域は近年新田辺駅西側を中心とする区画整理事業がおわり、かつての田園地帯から都市へと急激な変貌を遂げつつある。その都市化にともない、試掘調査・立会調査を多く実施しているが、遺構・良好な遺物包含層はみつかっていない。かつては、この付近一帯が沼沢地や流路であったことが判明してきている。



第4図 周辺地形図 ($S = 1:5,000$)

3 調査経過

今回の調査対象地は、JR京田辺駅の東側、NTTビルのすぐ北側である。対象地の北側には、第1次調査地となった京都府田辺総合庁舎がある。

調査前の状況は、区画整理による造成が終了し、平面形がほぼ台形の敷地で、南北約130m・東西70~130mを測る。駅寄りの南西部が高く北東に向か徐々に低くなっている。比高差は2.5mある。これは造成前とほぼ同じ状況である。ちなみに、対象地の南辺にはかつて田辺保育所があった。

試掘調査は平成8年11月11日から行ったが、対象地の中央部が大量の土砂の仮置き場となっていたため、縁辺部を順次重機で掘削していくこととした。13日までに合計15か所を掘削したが、敷地内南西隅の最高所から弥生時代の造構がみつかり、北辺部の西寄り部分から中世の遺物がみつかったので、この2地点を拡張して調査することとした。

本調査は平成9年2月12日から開始した。弥生時代の造構がみつかったところを10m×10mで1トレチ、中世の遺物がみつかったところを6m×6mで2トレチとし、それぞれ調査を進めた。

1トレチでは、最近の擾乱を受けてはいるものの弥生時代の溝が「く」字になることがわかり、さらに調査範囲を広げた。調査地は造成による盛土直下が造構面あるいは遺



第5図 作業風景（西から）



第6図 現地説明会風景



第7図 作業風景（北から）

物包含層であったが、造成によるためかとんでもなく堅い地盤になっていた。そのためツルハシでないと全く歯が立たない状況で、思いのほか時間を要した。結果的に弥生時代前期に作られた方形周溝墓であることが判明し、平成9年3月13日に報道関係への発表、3月15日には一般を対象とした説明会を行った。

2トレンチでは、中世の遺物が小片でみつかったほかは、遺構等はなかった。

現地調査は3月27日に埋戻し、撤収を終了した。

4 調査概要

本調査は前述のように2か所のトレンチを設定し調査を行ったが、北側の2トレンチでは、土師器皿・瓦器碗の小片を含む遺物包含層の下は、中世以前の天津神川の氾濫によるものと考えられる土層の堆積で、遺構等はみつからなかった。このため以下は1トレンチの記述のみ行うこととする。

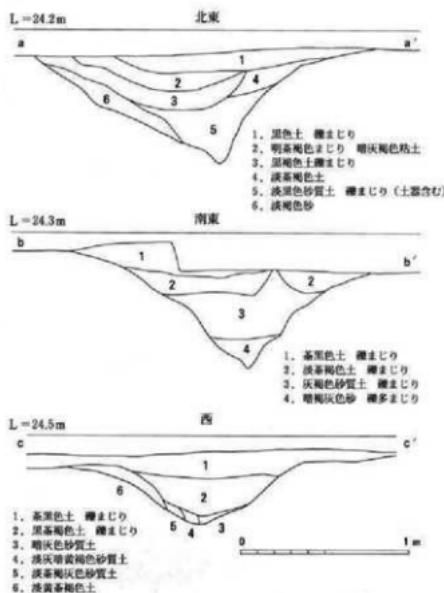
この1トレンチは、敷地内の最高所にあたり、西側は道路をへだててJR京田辺駅のホームが見える。かつては水田であり、一部はその後田辺保育所の建物があった場所である。トレンチの東端は一段低く、北端はさらに一段低くなったが、これは近世頃の水田經營によるものである。

基本的な層位は盛土ないし搅乱土の下に部分的に遺物包含層である灰茶褐色土がみられ、その下が遺構のみつかる面となる。この面は場所により土質が異なり、黄灰色や褐色・灰褐色の砂質土・砂礫土がみられる。遺構面の標高は、約24mをはかる。

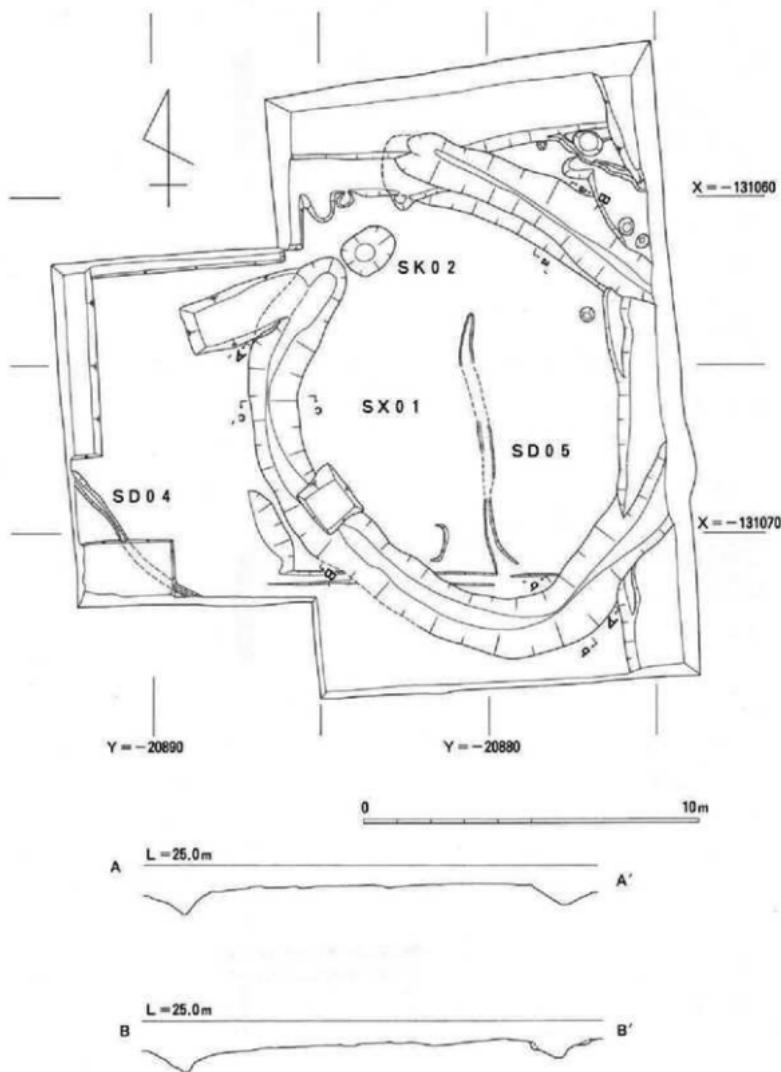
今回みつかった遺構には、方形周溝墓1基、溝、土壙がある。

方形周溝墓 SX01 周溝の四辺がみつかったもので、地形にあわせて溝をめぐらせるため、南北方向の溝は方位に対し35度程度東に振っている。溝は全周せずに北西部で約2.5mの間とぎれ、陸橋部を形成する。東コーナー部はトレンチ外にのびるが、溝はめぐるものと考えている。みつかった西・南のコーナーは丸みをもち、鈍角で各々の溝がつながる。

規模は溝心々で北東・南西約11.5m、北西・南東約11.8mと後者がやや長い。各溝は、北東溝が幅1.9~2.1m・深さ0.7m、南東溝が幅1.9m・深さ0.7m、南西溝は最近の擾乱が著しいものの幅1.4~1.9m・深さ0.4~0.6m、北西溝が幅1.8m・深さ0.4~0.6mをそれ



第8図 方形周溝墓 溝土層断面図 (S=1:30)



第9図 1トレンチ調査図



第10図 方形周溝墓全景（北西から）



第11図 方形周溝墓全景（南東から）

ぞれ測る。東側が深く、西側が浅い、ことに西コーナー部は深さ0.3mと浅く、溝幅もせまい。溝の横断面は、北西溝・南西溝・東南溝の東部分ではゆるい逆台形であるが、北東溝・東南溝の西部分では底の幅が0.1mにも溝たないV字形を呈する。



第12図 周溝北東アゼ断面

台状部から主体部はみつからなかった。ただ、この部分から南北方向の溝SD05がみつかり、埋土からは周溝と同時期の弥生時代前期の土器片がみつかった。のことから、この高さ付近が当時の生活面に近い高さであつことが推定され、この高さから上方に盛土され、そこに主体部があつたものと理解している。

遺物は各溝の各層から弥生時代前期の土器小片がみつかっているが、量的には少ない。北西溝からはツボ・鉢などがやまとった形でみられる。また、弥生土器に混じり凸帯紋をもつ繩紋土器もみられる。

土壤 SK02 SX01の北西溝がとぎれたところにある長径1.6m・短径1.2mの深い土壤。当初、北西溝の延長部かともみられたが、方向・深さから別のものと考えた。溝SD05同様にSX01より古い時期とみている。埋土内から弥生時代前期の土器片とサスカイト製の削器がみつかった。

溝 SD04 トレンチ西端でみつかった溝。幅0.2~0.3m・深さ0.2mを測る。埋土から弥生時代前期の土器片がみつかった。

溝 SD05 方形周溝墓の台状部中央でみつかった南北方向の溝。幅0.2~0.4mの深いもの。状況から方形周溝墓より古い時期とみられる。

5 遺 物

今回の調査でみつかった遺物は、縄紋土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式土器・瓦器・陶器・磁器・石器・錢貨（開元通宝）などである。量的には、整理箱につめて3箱程度である。図示したものは1トレンチの方形周溝墓・土壤・遺物包含層などからみつかったものである。

方形周溝墓 SX01 (1~3・5~11) 弥生時代前期後半のツボ (1~3・6・7)・カメ (5)・鉢 (8・9)、縄紋時代晩期末の深鉢 (10・11) がある。

1はツボ口縁部で口径13.4cmを測る。淡褐色を呈し、大粒の砂粒を含む。調整は外面はヘラミガキ、内面はユビナデとみられる。2はツボの頸部で6条以上のヘラ描沈線紋が施される。外面はたて方向のヘラミガキ、内面はユビナデで、淡褐色を呈する。3もツボの頸部で4条のヘラ描沈線紋がみられるが、上の1条は部分的に削り出し風になっている。5はカメの底部である。底外面中央を凹ませている。ユビオサエ痕がよくわかる。6・7はツボの底部である。7は生駒西麓産である。8・9は鉢である。8は口径33.0cmで、淡茶褐色～暗灰褐色を呈する。調整は不明である。9は復元口径36.0cmで、大粒の砂粒を大量に含む。淡い褐色を呈し、調整不明。

5が周溝の南東辺の底、7が南コーナー部分からみつかったほかは北西辺の上層部からみつかった。

以上の弥生土器は、前期後半に属するものである。

10・11は深鉢である。10は復元口径26.0cm、11は30.0cmを測る。ともに口縁端部に接して、D字形の凸帯を貼り付ける。凸帯には横長のD字状刻みを施す。10は生駒西麓産の長原式、11は黒褐色を呈し、胎土からは他地域産とみられる、長原式併行期のもの。

その他 (4・12~16・17)

4は弥生土器のカメで、方形周溝墓南西辺の搅乱部分からみつかったもので、本来は周溝内にあった可能性が高いものである。復元口径16.0cmを測る。暗灰色を呈し、調整不明である。

12・13は包含層からみつかった縄紋土器の深鉢である。12は復元口径29.3cmを測る。△形の断面三角形の凸帯を口縁端部に接する部分と肩部に貼り付ける。口縁側の凸帯は上下からつまむようにナデられ、刻みは原則として行わないようだが、一部にはそれらしい痕跡もみられる。肩部の凸帯には横菱形の刻みが施される。明黄灰色を呈する。長原式併行期のもの。13は口縁端部よりわずかに下がったところに△形の凸帯がある。凸帯下端は未調整である。凸帯には棒状工具をあてたような軽いV字刻みを施す。淡褐色を呈する。長

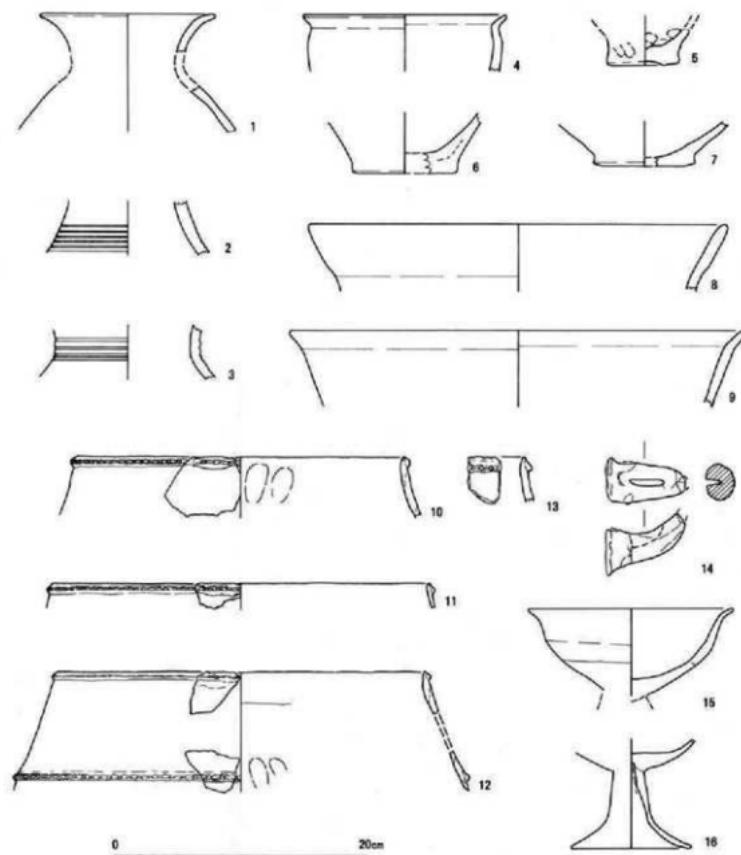
原式併行期か若干それより古い時期とみられる。

14は包含層からみつかった韓式土器の把手である。把手上面には深さ1cm強のえぐりがある。胎土は密で淡黄茶褐色を呈する。15・16の高杯と同時期のものと考えられる。

15・16は周清墓西コーナー上部からみつかった土師器の高杯である。赤褐色を呈し調整不明である。古墳時代中期の布留式に属する。

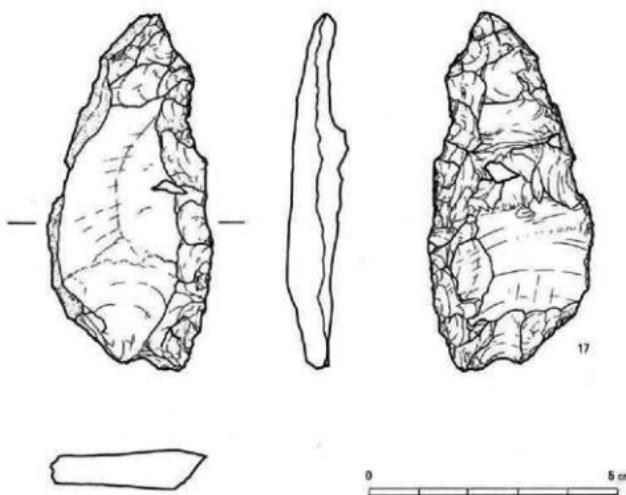
17は土壤SK02からみつかった削器である。弥生時代前期に属するものと考えている。

サスカイト製。

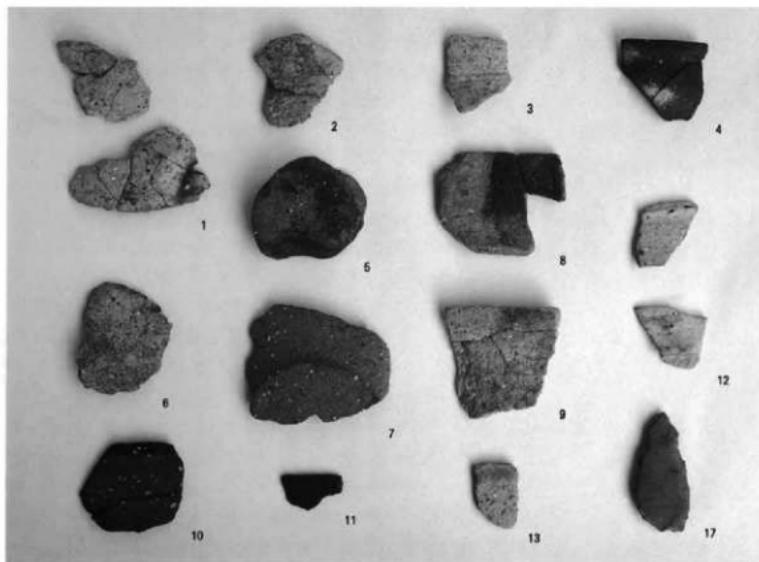


SX01 1～3：弥生土器ツボ 5～7：弥生土器底部 8・9：弥生土器鉢 10・11：縄文土器深鉢
遺物包含層 12・13：縄文土器深鉢 14：韓式土器 15・16：布留式土器高杯
南攤乱 4：弥生土器カメ

第13図 遺物実測図



第14図 石器実測図



第15図 遺物

6 まとめ

今回の調査は稻葉遺跡での4回めの発掘調査であったが、これまでの中では最大の成果があったものといえる。

遺構では、弥生時代の方形周溝墓がみつかったことであり、遺物では、縄紋土器・弥生土器・土師器・韓式土器がみつかったことである。

方形周溝墓については、弥生時代前期に属するものであり、山城地域でも類例の極めて少ないものである。一般に方形周溝墓は、近畿地方の墓制とされ、大和・河内といった中心部にその発生が求められ、順次拡散したものとされる。ただ、中心部を含め、前期の例は未だ少なく、今回のものは重要な1例を加えたことになろう。また、南山城地域においては、前期の遺構例がほとんどなく、京田辺市内の3地点で土壌がみつかっているだけである。今回は墓地の発見であり、調査地の周辺に集落の存在が推定される。

今回みつかった方形周溝墓は1基のみであるが、気づいた点等をいくつか並べてみると

- 1 周溝は全周せずに一部途切れ陸橋部を形成する。
- 2 溝の断面はゆるい逆台形の部分とV字形の部分がある。
- 3 溝は西側が浅く東側が深い。
- 4 周溝内に遺物は少ない。いわゆる河内の土器がある。
- 5 台状部から主体部はみづからず、同時期の土壌・溝がみつかったことから、これらがみつかった面がほぼ当時の生活面付近とみられる。

以上のようなあるが、5のようにみた場合、みつかった面から上方に盛土が行われ、そこに主体部があったことになる。すると盛土の具体的な高さは不明であるが、かなりの高さをもっていたことになる。

縄紋土器は方形周溝墓の溝内及び遺物包含層からみつかった。時期は晩期末の長原式に属するものであり、4点以上ある。土器には、生駒西麓産の胎土で作られたものもあり、搬入経路を考える上で注目される。市内ではこれまでに興戸遺跡で長原式のものが1点みつかっており2例めとなる。

土師器は古墳時代の布留式土器であり、時期的には韓式土器も同時期のものと考えられる。布留式土器は方形周溝墓北西溝上部から、韓式土器は遺物包含層からみつかっている。

地形的にみて遺物包含層は西からの堆積土であり、調査地の西方つまりJR線以西の現在の集落の下に縄紋時代・弥生時代・古墳時代それぞれの集落が重複し、展開していたものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	いなばいせきだいりじはくつちょうさがいほう							
書名	稲葉遺跡第4次発掘調査概報							
副書名								
卷次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	鷹野一太郎							
編集機関	京田辺市教育委員会							
所在地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
発行年月日	1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
稲葉遺跡	京都府 京田辺市 田辺明田60	26342		34° 49' 08"	135° 46' 18"	1997年 2月12日 ～ 1997年 3月27日	500	大規模 店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
稲葉遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	繩紋土器 弥生土器 石器 布留式土器 韓式土器		弥生時代前期の 方形周溝墓		

平成10年3月30日 印刷
平成10年3月31日 発行

稻葉遺跡第4次発掘調査概報
—アル・プラザ京田辺店建設地の調査—
(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第24集)

編集・発行 京田辺市教育委員会
〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地
電話 0774-62-9550

印 刷 明新印刷株式会社
〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地
電話 0742-63-0661